

## 子どもの手術で思うこと

——子どもに病気をどう伝え、どう立ち向かわせたらいいのか——

木村 民子

長男の学の耳の聴こえが悪いのではないかしらと、気になり出したのは、学が五歳の誕生日を迎えるころでした。呼んでも返事をしない、テレビの音を大きくかけて聞くなど、ちょっと気になる症状が出始めたのです。

初めは、テレビに夢中になっているからだろうか、何か自分で一生懸命やっているの、話しかけても気がつかないのだろう、このくらいの年齢ではよくあることと、タカをくくっていました。

保育園に通っていましたが、子どもたちの元気な声や先生の張りのある大きな声は、まだ聞こえていたようです。担任の先生にも、相談しましたが、園ではそれほど

異常は感じられないということでした。

けれども次第に私が小さい声でボソッと言ったときなど「エッ？」と聞き返すことが多くなりました。言われたことにも、はかばかしい返事が返ってきません。

耳鼻科に何回か、連れていき診てもらいましたが、いつも、もう少し様子を見ましようということになりました。

そうやって、気にかげながらも、毎日の忙しさに追われていくうちに、月日が過ぎ、いつのまにか、学は六歳の秋を迎えました。

来春、小学校入学を控えての就学児健康診断があり、

私が学を連れて行ったときの事です。控室で待っていると、突然「木村学君のお母さんはいますか」と呼ばれました。私が驚いて立って行くと、「どうも学君は聴力に異常があるようです」と言われたのです。やっぱりと思いつながらも、何故か震えてしまいました。面接の時、校長先生も心配して下さり、学校に上るまで一度精密検査を受けたほうがいいでしょうと勧めて下さいました。

どうして今まで、しっかりした病院で診察を受けなかったのかと悔まれてなりません。早速、以前私が耳の手術でお世話になった先生がまだいらっしゃるので、東大病院の耳鼻科に学を連れていきました。

診断の結果は、扁桃腺とアデノイド肥大、及び滲出性中耳炎でした。

滲出性中耳炎は、最近、四、八歳ぐらいの子どもに増えてきている病気だそうです。痛みも発熱もないので、本人もまわりも気づかないうちに、じわじわと聴こえが悪くなっています。

学の場合、扁桃腺もアデノイドも並外れて大きいた

め、炎症をおこしたりすると、耳管の粘膜がはれたり、耳管が閉じたりしがちなのです。そうすると耳管に空気が入りにくくなり、中耳に粘液がたまりやすくなります。又、組織液も滲出してきます。と同時に、中耳が陰圧になり、鼓膜が内側にへこんでしまうのです。そのため、聴力に影響を生じるというわけです。

ですから、鼓膜に穴をあけて、たまった液を吸い出すだけで、聴力は回復するそうですが、子どもの場合、鼓膜に穴を開けるのは、一大事。大人なら外来でも処置できますが、子どもは怖がったり、痛がったりで暴れると危険なので、全身麻酔をかけて手術をするということでした。

又、扁桃腺とアデノイドをとらないと、中耳炎が再発する可能性があるし、肥大ぐらいでは、手術を控える傾向があるといっても、学の場合は、よく熱を出し、かぜをひきやすい、いびきがひどい、口で息を吸う、よく食べ物を呑みこめないなどの症状がみられるので、思いきって、扁桃腺とアデノイドの摘出手術もしようというこ

とになりました。

お医者様から説明を受けたとき、私はガンと頭を殴られたような気がしました。私がもう少し注意してあげればよかったのです。

言われてみると、学のいびきはかなりひどいものでした。眠っているときに、ガガーガッといびきが急にとだえて、息をしているのか不安で、揺り起こすこともしばしばありました。

口をいつも半開きにしているので、「しっかり口をしめなさい。バカみたいに見えるわよ」と、無理な注文を出して、叱ったこともあります。食事のときは、牛乳を必ず飲む癖がついていました。牛乳が好きだからと思っ  
ていましたが、きつと噛んだものをよく飲み込めなかつたので、流し込んでいたのでしょう。

二―三歳の頃は、毎月、一―二回は四〇度近くの熱を出していました。医者に連れていっても扁桃腺の熱だからと、下るのをじっと待つだけでした。その熱も四―五歳ぐらになると、ほとんど出さなくなり、扁桃腺も気

にならなくなっていましたのに。扁桃腺肥大の影響がこういう形で出てくるとは思いもありませんでした。

急性中耳炎には、四―五回かかっています。痛がるとすぐ医者に連れて行っていたので、ウミが出る前に抗生物質の薬を飲んで直っていました。ところが、抗生物質の使用が裏目に出て、滲出性中耳炎が急増している”という先生もいるそうです。

ともあれ、手術は決ったのです。過去のことをあれこれ言ってもしかたありません。確かに、学にとつては、わずか六年間の人生の大半を何の因果か、苦しまなければならなかったのですから、母親としては申し訳ない気持ちでいっぱいです。

けれど幸い、簡単な手術です。入院も一週間ぐらいたすみそうです。実を言うと、長女の方は先天性の心臓病で、四歳のとき大手術をしています。それに比べたら、たいしたことない、私は気楽にかまえていました。

とはいえ、本人に手術のことを何と伝えようか、どう納得させようか、思案しました。長女のときは、手術も

何もまだよく解らない年齢ですから、「ママと病院へお泊りしようね」と誘ったのです。幸い心臓病の方は、痛みもなく、症状も見かけは普通の子と変りなかったので、長女は病気のこわさや、手術の大変さを知る由もなく、無邪気に、私を独占できる喜びで、「うん」と素直にコックリうなずいたものでした。

しかし、学はもう六歳ですから、解る範囲で説明してやらなければなりません。特に、この子は自分で納得しないと頑として動かないところがあります。

不必要に怖がらせないよう、「学ね、おのどの扁桃腺というのが大きいから摘んだって、それから、お耳がよく聞こえないから、先生が聞こえるようにして下さるのよ。その方がいいものね」と、さりげなく話してみました。「うん、でもさ、お姉ちゃんみたいに、切ったところ残るの?」「ううん、のどや耳の中だから、切ったところ見えないのよ」「ふーん、でも、痛いでしょ」「ちっとも痛くないわよ。だって学が眠っている間にしちゃうんだもの、平気だよね」「うん」

ちょうど、保育園のお友だちで、学と同じ症状の子がいて、その子は一足先に手術をし、元気な姿で戻ってましたので、学は「ぼくも手術するんだよ、今度はぼくの番だ」と、むしろ、得意になって友だちに言いふらしていたようです。

保育園の卒園式の後、三月十九日に入院しました。初めの夜は、私と二人きりになると、「ママ、こわいよ。一緒に寝てよ」と泣きべそをかきました。が、翌日、父親がそのことを冷かすと、「ううん、ぼく、あくびしただけだよ。それで涙がちょっと出ただけなの」と、学は負けおしみを言っていました。

「ぼく、注射しても泣かないよ。一本ぐらい平気だもん」と言っていたのに、手術の朝、二本もされて、やっぱり涙がポロポロこぼれ、声を出さずにシクシク泣き出しました。

親はそばにいながら何も助けてやれません。「がんばってね」と声をかけるだけ、ただ、手術の成功を祈るばかりでした。

手術は順調でしたが、出血がひどく、その処直のため思いの他時間がかかりました。戻ってきた姿を見て、私は血の気が失せました。耳や鼻や口から出血したあとがあり、鼻とのどに止血用のガーゼがつめられて、点滴で身動きできないのです。それから二日ぐらい、苦しい日が過ぎました。

よくしゃべれないので、何を言いたいのか、なかなか掴めません。そのうち、学は点滴をしていない手を胸の前に立て、「オギノイ」と言うのです。初め、何だろうと思いましたが、ハッと気づき、気づいたとたん、私は涙があふれてきました。「おいのり」と言ったのです。余り苦しいから、神様に助けて下さいと子ども心にお願いしたくなったのでしょうか。学の小さな手と私の手を合せて、お祈りしました。

そんな学も、ガーゼをとってもらうと、とたんに食事もとれるようになり、めきめき元気になりました。聴力も驚くほど回復し、「うるさい」と耳を押えるくらい、世の中の騒音をいやがっていました。入学以来、一日も

休まず、三ヵ月後には、スイミングスクールに通えるようになりました。

二人の子のどちらも、小さなうちに手術を経験させてしまった親として思うのですが、入院中の闘病生活はもちろん大変にはちがいないけれど、手術のことを本人に伝え、それを納得させることに、私は一番心を痛めました。病気は怪我とちがいで、原因結果がはっきりしていません。まして生まれつきの障害を持った子は、運命として、それを甘受しなければなりません。

そうした病気を子どもが受け入れ、立ち向っていく強さを親はどのように与えたいのでしょうか。がんばれと口で励ましたり、おもちゃやお菓子でだますことも、少しは効果があるかもしれませんが、それは根本的な支えにはならないでしょう。幼い我子は、祈ることでも苦しみに耐えました。家族や周囲の「愛」が、力となるかもしれません。

現代の小児医学が、子どもの病気について、そこまでケアして下されば、ありがたいと思うのです。